アートを

2019.5 - 2020.2
東大阪市民美術センター

この「アートを知る、見る、語～る」は、もっとアートが身近で豊かな文化生活を育む為に、美術ファンのみならず市民の皆さんや国内外からも参加するような異文化交流に発展することを目指します。

広く一般の方がアートに触れる時、その歴史的背景やエピソードを知ることで、よりアートの奥深さや魅力を発信できるものと思います。

この東大阪市は、「モノづくりのまち」、「ラグビーのまち」と標榜されていると同時に有数の大学が点在する「学生のまち」です。そのような環境でアートを学ぶ若い世代から高齢者までもが集う世代間交流でもあるでしょう。

この事業は、東大阪市民、事業者、研究者、学生の皆さんを対象に、様々な分野からユニークな講師をゲストに迎え、興味深いお話を提供していただけるものと期待が膨らみます。

（10・3月除く）

毎月1回　土曜または日曜開催

午後2時～3時30分　受講料：無 料

運営企画：公益財団法人 東大阪市文化振興協会
協力：大阪府、大阪商業大学、近畿大学

※申込不要、先着順（定員120名）

東大阪市民美術センター
1階、2階会議室、展示室

東大阪市吉田6丁目7−22　TEL：072-964-1313

第1回　5月26日(日)
「アートで地域が救えるか!?
−全国各地で開催されるアートプロジェクト」
近畿大学文芸学部文化デザイン学科
教授　西野昌克

第2回　6月16日(日)
「新原風景は温暖化を救えるか」
出展作家
ブライアン・ウィリアムズ

第3回　7月27日(土)
「文化財とはいったい何なのか?
−その分類をめぐって」
近畿大学文芸学部文化デザイン学科
講師　梅原宏司

第4回　8月11日(日)
「アートプロジェクトの現場
アートと社会、そして取り巻く人々の関係」
インディペンデントキュレーター
山中俊広

第5回　9月1日(日)
「東大阪の歴史と産業を記録する
−写真の役割と魅力について」
工場を記録する会　岡本好行、
写真家　川勝 親、聞き手　西野昌克

第6回　11月9日(土)
「路傍の美術
～見立ての楽しみ～」
大阪商業大学公共学部准教授
商業史博物館主席学芸員　明尾圭造

第7回　11月23日(土)
「第4回若手アーティスト支援事業
−作家と選考委員によるギャラリートーク−」
若手支援事業からの選出作家＋
聞き手　選考委員

第8回　12月22日(日)
「アートやスポーツ・ラグビーが
もたらしてくれるもの−
元ラグビー日本代表 林 敏之氏を迎えて」
スポーツイラストレーター　尾中哲夫

第9回 2020年　1月18日(土)
「療養環境におけるアートの
役割と可能性」
近畿大学文芸学部文化デザイン学科
教授　森口ゆたか

第10回 2020年　2月15日(土)
「須田剋太ワールド
−宇宙生命体全体実体−」
大阪府府民文化部
中塚宏行

※都合により、内容等が変更になる場合があります。

第1回 5月26日(日)

「アートで地域が救えるか!?
－全国各地で開催されるアートプロジェクト」

西野昌克
近畿大学文芸学部文化デザイン学科教授、日本アートマネジメント学会会員。ベトナムとの国際交流として戦争証跡博物館の壁画「白鳩が平和を運ぶ」プロジェクトを監修。オープンファクトリー「こーばへ行こう！」や東大阪市民美術センターのナイトミュージアム、河内寺隊寺跡史跡公園など産学連携の地域活性化事業に取り組む。

【概 要】
香川県が主催する「瀬戸内国際芸術祭」に年間100万人を超える人が、瀬戸内の12の島を訪れます。ブラックツーリズムとして負の側面を持ちながら、美しい島々と現代アートが融合した瀬戸内芸術祭の見所とその経済効果から、東大阪市の可能性についてオープンファクトリー「こーばへ行こう！」などの事例をスライドで紹介しながらアートと地域社会について振り返ります。

第2回 6月16日(日)

「新原風景は温暖化を救えるか」

ブライアン・ウィリアムズ
1950年ベルー生まれのアメリカ人。カリフォルニア大学にて美術専攻。1972年世界一周の写生旅行の途中立ち寄った日本の風土や人情に魅了され定住。水彩画、油彩画、版画に加え、独自発想の曲面絵画を発表、全国各地で個展を開催。「光、空気、静寂」を表現する現場絵描き。日本の美を紹介するとともに自然保全、再生に向けた活動も行う。

【概 要】
私のライフワークは絵を描くことです。何もない真っ白なキャンバスに一つの世界を作っていく。この魔法にはまってしまい、風景画に人生を捧げてきました。美しい風景は環境の健康をはかるバロメーターです。ますます深刻になってきている地球温暖化により、全てが奪われてしまうと案じるのです。化石燃料悪だけでない、実現性のある解決作が見えてきています。その解決作の色は、なんと！グリーンなのです。

第3回 7月27日(土)

「文化財とはいったい何なのか？
－その分類をめぐって」

梅原宏司
近畿大学文芸学部文化デザイン学科講師。専門領域は文化政策、ならびに文化政策と接する社会教育。元来は演劇に関する政策を専門としていたが、現在は「文化政策と社会教育の境界」に関心があります。今回はその境界上にあるモノの一つ、「文化財」をみなさんとともに考えてみようと思います。

【概 要】
「文化財」とはいったい何なのでしょうか？おそらくみなさんは、古い古い「伝統」がまとわりついているモノ、あるいは、「世にも美しい芸術」を考えるかもしれません。
しかし実際にはそう簡単なものではありません。そこで「伝統」や「美」などの価値がどう制度的に分類され、認められるのかをみなさんといっしょに考えてみようと思います。あなたのお家のガラクタでも、ひょっとすると「文化財」なのかもしれませんよ…。

第4回 8月11日(日)

「アートプロジェクトの現場
アートと社会、そして取り巻く人々の関係」

山中俊広
近畿大学文芸学部文化デザイン学科非常勤講師 学芸員、ギャラリー勤務などを経て、2012年よりキュレーターの活動を開始。「奈良・町家の芸術祭はならぁと」、「飛鳥アートヴィレッジ」、「HUB-IBARAKI ART PROJECT」などの地域型アートプロジェクトにディレクターとして関わり、現代美術と地域資源、一般市民、行政機関をつなぐ企画をおこなっている。

【概 要】
近年の地域型のアートプロジェクトは、表に現れる展示・イベントと一般の鑑賞者といった単純な構図だけではなく、現場の運営や企画のプロセスに様々な立場の人々が関与する複雑な作りとなっています。アートと社会との距離がより近づいている昨今、現場では様々な課題や摩擦が生じており、アートを介したコミュニケーションの対応力が随所で問われています。プロジェクトの現場での具体例を紹介しながら、理想的なアートと社会の関係について論じます。

第5回 9月1日(日)

「東大阪の歴史と産業を記録する
－写真の役割と魅力について」

川勝 親
1960年生まれ。株式会社川勝溶工所 代表取締役。町工場の記録を撮り続けて15年。写真歴43年。24歳で写真は趣味とし、家業の溶接屋を継ぐ。

岡本好行
町工場の果たしてきた役割とその歴史を後世に長く伝える為に、2018年12月にフレスポ東大阪に「東大阪ものづくりミュージアム」を開設。

【概 要】
町工場写真展と連動する形で、展覧会にご協力いただいた川勝親氏と岡本好行氏を迎え、ものづくりの町 - 東大阪の魅力を発信し続けることの意義やその歴史的背景、さらに写真のもつ作品としての有用性や今後の活動についてお話を伺います。（聞き手／西野昌克）
また展覧会に見られる写真作品についての感想や将来的な展望に触れ、来場者の皆さんとの交流の機会にしたいと思います。

第6回 11月9日(土)

「路傍の美術
～見立ての楽しみ～」

明尾圭造
1961年布施市（現東大阪市）生まれ。関西大学大学院修了。芦屋市立美術博物館を経て、現在、大阪商業大学公共学部准教授。専門は日本近世近代文化史。共著書『モダニズム出版社の光芒』（淡交社）、『モダン道頓堀探検』（創元社）、『古地図で見る阪神間の地名』（神戸新聞総合出版センター）、担当展覧会「阪神間モダニズム」「モダニズムを生きる女性」「伊勢物語と芦屋」「菅楯彦の世界」「近世浪華の町人と文人趣味」など。

【概 要】
誰もが知る、あるいは歴史的に意義のあるものだけが芸術なのでしょうか？
日常に使う雑器や縁日などで売られる古物骨董の中にもキラリと光るものがある。
自らのアンテナを高く上げ、自分見立ての面白さを愉しんでみませんか。路傍に置かれたもの、組合せによって輝くものなど、様々な現物資料をもとに考えてみたいと思います。

第7回 11月23日(土)

「第4回若手アーティスト支援事業
－作家と選考委員によるギャラリートーク－」

展覧会：11月20日（水）～12月1日（日）
作家：公募作家の中から9月中旬頃に決定

選考委員：
大阪商業大学商業史博物館主席学芸員 明尾圭造
大阪府府民文化部 中塚宏行
近畿大学文芸学部文化デザイン学科教授 西野昌克

【概 要】
東大阪市民美術センターでは、平成28年度より、若手アーティストの作家活動を支援するため、当センターにおいて作品発表を行う展覧会開催の機会提供を行っています。主に大阪府周辺にて作品制作活動を行い、発表を続けている個人およびグループが対象で、年齢は概ね30歳代まで。これまでに3人のアーティストが選出され、展覧会を行いました。ジャンルは特に定めず、当センター利用条件を遵守し発表展示できるものに限ります。今年度の応募期間は6月20日～8月20日まで。どんな作家が選ばれ、どんな展覧会が開かれるか、ご期待下さい。

第8回 12月22日(日)

「アートやスポーツ・ラグビーがもたらしてくれるもの－
元ラグビー日本代表 林 敏之氏を迎えて」

尾中哲夫
1957年生まれ。1983年、京都市立芸術大学大学院修士課程修了。1985年、フリーランスイラストレーターとして活動し始める。1997年、月刊ゴルフダイジェスト誌表紙画担当、継続中。スポーツをモチーフとした個展多数開催。フルマラソンやウルトラマラソン多数完走。今も現役でラグビーをプレイしている。

【概 要】
僕はラグビーをプレイしてラグビーの絵を描く数少ない男です。プレイする者ならではの視点から、内容のリアルな絵画を目指しています。スポーツ・ラグビーを観る楽しさは選手達のパフォーマンスの妙にあります。アートも同様、作家の繰り出す色彩や形状に魅了されるわけです。一瞬の美であるスポーツシーンを絵画に定着させるのは、とても困難で且つ魅力的な行為です。今回、お話させてもらうことでスポーツ・ラグビーを観るプレイする楽しさ、アートを観る創る楽しさに触れてもらえる一助になればと思っています。

第9回 2020年 1月18日(土)

「療養環境におけるアートの
役割と可能性」

森口ゆたか
美術家、近畿大学文芸学部文化デザイン学科教授。NPO法人アーツプロジェクト副理事長。1986年、シカゴ美術館附属美術大学大学院彫刻科修了。2011年、徳島県立近代美術館にて個展「あなたの心に手をさしのべて」を開催。2004年、NPO法人アーツプロジェクト設立。数多くの病院でホスピタルアートの企画、実施、運営に携わる。

【概 要】
近年日本でも少しずつ広まってきているホスピタルアートについてご紹介します。医療とアート、現代では全く違う分野だと認識されていますが、歴史的に見れば、深い結びつきがあります。近代化の流れによって両者は隔絶され、それによって取りこぼしてきたものを救い上げるような活動がホスピタルアートとも言えるでしょう。講演では様々な海外、国内の事例を挙げて紹介し、療養環境に於いてアートがどのような力を発揮し、この超高齢化した日本社会においてどのような可能性があるのか？を解説します。

第10回 2020年 2月15日(土)

「須田剋太ワールド
－宇宙生命体全体実体－」

中塚宏行
1954年大阪生まれ、77年大阪大学文学部美学科（美術史専攻）卒。77～92年、北海道立美術館（札幌、旭川、函館）の学芸員、学芸課長を経て、92年～現在まで、大阪府文化課で美術担当の学芸班長、主任研究員、研究員として勤務。大阪トリエンナーレ、現代美術センターの事業などに携わる。美術評論家連盟会員。

【概 要】
須田剋太の没後30年を記念して開催される「今、甦る、須田剋太ワールド 抽象・具象・書」展にあわせて、あらためて須田剋太の人と芸術について語ります。
関東に生まれ、戦前は官展（文展、新文展）で活躍しながら、戦後、関西の文化人との交友の中から、抽象絵画や書の世界にも足を踏み入れ、戦後日本の美術界で、独自の世界を築いた須田剋太とはどのような人物であったのか、その芸術世界はどのようなものであったかをふりかえります。

時間：午後２時～３時30分
受講料：無料 申込不要、先着順（定員120名）
場所：１階、２階会議室、展示室

※都合により、内容等が変更になる場合があります。

〈申込・問合せ先〉

東大阪市民美術センター

〒578-0924 東大阪市吉田6丁目7-22
電話：072-964-1313
FAX：072-964-1596
http://higashiosaka-art.org/
https://www.facebook.com/ham1313art/

近鉄奈良線「東花園駅」より
徒歩約10分 花園ラグビー場南側